

Rotis の間違った記述

立野竜一 2014. 6. 1

Rotis

Rotis Sans Serif 55

Rotis

Rotis Semi Sans 55

Rotis

Rotis Semi Serif 55

Rotis

Rotis Serif 55



組版工学研究会『欧文書体百花事典』（朗文堂 2003）

●Rotis を紹介した書籍

Rotis という欧文書体があります。1988年に発表されたこの書体は、ローマン体とサンセリフ体、その中間の特徴を持った書体2種類の、計4種を基軸とした新しい考え方の書体として登場し、発表当初から話題を集めました。現在のデジタルフォント環境でも一定の人気を保っていて、フォントメーカーの売り上げランキングにも常に顔を出しています。やや長体気味の文字骨格で、モダンで理知的な印象の書体です。

この書体を紹介する文章が、『欧文書体百花事典』という本に載っています。この本は、欧文書体の定番書体や名作書体を取り上げて、その開発の背景等を専門的に解説したもので、タイポグラフィー関連の書籍で知られる朗文堂から2003年に出版されたものです。この中でRotisも取り上げられていて、この書体のデザイナーのオトル・アイヒャー (Otl Aicher) の活動や思想にまでせまった専門的な内容が書かれています。この中に、アイヒャーがパリの講演で、次のような発言をしたと書かれています。あらかじめ断っておきますが、この記述には問題があります。

“ところで生前のアイヒャーは各地で講演をしました。その中でも逝去の寸前にパリで行われた講演がいまだに話題になっています。そこでのアイヒャーは自作活字書体のローティスを紹介しましたが、同時にきわめて難解な言葉を残しました。

「わたしはユニヴァースとタイムズ・ニュー・ローマンに多くの示唆をうけた。そしてわたしはローティスを作った。いずれローティスは、ヨーロッパにおける最大の対立項としての、カトリックとプロテスタントの相互の融和に貢献するだろう。」 (p. 512)

p. 515では同じ言葉が再度紹介され、次の文章が続きます。

“このことばはいまでも議論的になっています。とりわけ後半の宗教と活字書体の関連の部分に関しては議論が尽きないのが現状です。…”

つまり、ローマン体とサンセリフ体の中間の特徴を持つRotis Semi Sans や Rotis Semi Serif を書体ファミリーに入れて制作した意図は、宗教的な対立を融和させるためであると、オトル・アイヒャー自身が発言したと紹介しているのです。この文章の著者は、ドイツ人デザイナーのアンドレアス・シュナイダー氏ですが、文章の最後にはこのように書かれています。

(著 アンドレアス・シュナイダー 監訳 片塩二郎)

●『デザインの現場』に掲載された片塩氏の文章

これとほぼ同じ内容の文章が、雑誌『デザインの現場』1997年6月号に掲載されています。朗文堂の片塩二郎氏のインタビュー記事で、“書体には、国家の歴史や宗教のイメージが付随している”ということ、エピソードを交えながら話しています。この中で、宗教がいかに書体と密接に関係しているかを詳細に述べている箇所があります（正確な文章を右に記載しました）。要約すると、

・ヨーロッパのタイポグラフィーは、カトリックとプロテスタントの宗教的対立の影響を受けている。

・カトリックの国ではオールドローマンなどのセリフ書体を好み、プロテスタントの国ではゴシックやサンセリフ書体を好む傾向がある。

と書いたあとに、

“ベルリンの壁が崩壊した1989年に、オトル・アイヒャー(1921—91^{*1})がローティスという書体を発表しました。”

“当時、ベルリンの壁も取り除かれ、EU統合の動きが高まる中で遅れを取るまいという焦燥感もあったでしょう。アイヒャーは、パリで行われた講演会で「(ローティスによって)カソリックとプロテスタントというヨーロッパの二項対立を取り除きたい」と明言したんです。これは大きな波紋を呼ぶことになりました。”

と書いています。カトリックとプロテスタントの記述、アイヒャーのパリの講演の話など、ほぼシュナイダー氏の文章内容と同じだということがわかります。

『デザインの現場』1997年6月号 (vol. 14 no. 89)

“文字で伝えるということ 朗文堂・片塩二郎さんの話”

(p. 30 途中から抜粋)

書体に現れるヨーロッパ内の対立!?

このように歴史の中で発達してきたわけですから、ヨーロッパのタイポグラフィは厄介な問題も抱えています。その中で、注目されるのは、カソリックとプロテスタントの宗教的対立です。日本人には、宗教と書体やタイポグラフィが関係あるといっても、どうもピンとこないかもしれませんね。

カソリックは、オーストリア、イタリア、フランス、ポルトガル、スペインといった国々に浸透しています。悪いことをしても教会にお金を持って行って懺悔すればよいという気質で、あまり働かない。概してファッションが発達し、食べ物おいしい。そして多産系であると。これと対照的なのはドイツを中心としたプロテスタントです。ミラノからアルプスを越えてシュツットガルトに入ると、それは歴然と理解できます。とたんに質素になる。食べ物はまずい、産児制限で子供は少ない、製品は精緻、造形もカチカチしている。プロテスタントは勤勉ですから結果、産業資本ができ、物資が大量生産され、当然大量販売のために広告も必要になります。だからグラフィックデザインが盛んになるんです。

カソリックの国ではファインアートがさかんで、神に捧げるものとされ重視される。プロテスタントでは、機能を重視するグラフィックデザインがさかんで、主たるパトロンは企業です。当然、使われる書体も違って、プロテスタントは、ジャーマンブラックレター、テキストタイプに代表されるゴシック、サンセリフにいやすかった。カソリックは、そうした機能剥き出しの書体を嫌ってオールドローマンなどのセリフ系書体を好んで使っていました。

ベルリンの壁が崩壊した一九八九年に、オトル・アイヒャー(1921—91)が「ローティス」という書体を発表しました。アイヒャーは、ドイツのウルム造形大学の学長でドイツデザイン界の帝王といわれた人物です。このアイヒャーは、ローティスを提案し、『typographie』を著すことにより、正にタイポグラフィにおける「知の領域」というものを示したんです。当時、ベルリンの壁も取り除かれ、EU統合の動きが高まる中で遅れをとるまいという焦燥感もあったでしょう。アイヒャーは、パリで行われた講演会で「(ローティスによって)カソリックとプロテスタントというヨーロッパの二項対立を取り除きたい」と明言したんです。これは大きな波紋を呼ぶことになりました。

やっかいなことですが、書体には歴史や民族性や風俗、さらには宗教までがぬきがたく付着しています。ですからタイポグラファーを目指す人は、たんに書体の好悪や美醜といった即感印象だけでは不十分なのです。アイヒャーは書体の構造と背景を読みとき、「伝達」という役割のなかで、タイポグラファーは何をすべきかを明示したわけです。

(後略)

●著者のシュナイダー氏に確認する

『欧文書体百花事典』に書かれている Rotis の文章の監修、翻訳をした人物が片塩氏であることから、はたしてこの文章自体、シュナイダー氏が本当に書いたものなのか？と疑問に感じました。そこで、直接シュナイダー氏にメールを送り率直に質問してみました。氏によると、Rotis に関するこの章の文章は、本人が書いたものであるとのことでしたが、“…そして私は Rotis を作った。いずれローティスは、ヨーロッパにおける最大の対立項としての、カトリックとプロテスタントの相互の融和に貢献するだろう。”の文章とそのあとに続く部分は、自分では書いた覚えがないとのことでした。

その後、シュナイダー氏に直接お会いし、話を伺いました*²。氏は日本語の文章を読むことができないため、私に指摘されるまで、このような文章がこの本の中に書かれていることにまったく気がついていませんでした。シュナイダー氏は元の原稿をドイツ語で書いたそうですが、ずいぶん前のことでもあり、手元には元の原稿が残っていないとのことでした。そのため、正確な確認はできませんでしたが、朗文堂側でドイツ語の原稿から日本語に訳した際に、片塩氏が文章を付け加えたものと推測されます。1997年に雑誌に書いた内容を、そのまま2003年発行の『欧文書体百花事典』に追記したことになります。

●オトル・アイヒャーの発言を調べる

2008年に、グラフィックデザイナーの大熊肇さんのブログ上で、“書体には、はたして宗教のイメージがあるのかどうか”という話題がとりあげられ、『デザインの現場』の片塩氏の文章が紹介されました。私自身、Rotis に関してそのような話は聞いたことがなかったため、このブログの文章がきっかけで、実際にオトル・アイヒャーが宗教に関する発言をしたのかどうかを調べてみることにしました。

1 — アイヒャーの著作『typographie』を読んでみる

片塩氏のインタビュー記事の中では、オトル・アイヒャーの著作『typographie』について触れている部分があります。この本の中には Rotis に関する章もあり、話の流れから Rotis と宗教についての何らかの記述があるように思えます。プロのドイツ語の翻訳者*³に依頼し、この本を全ページ読んでもらいました。宗教に関するワードが出てくる箇所にも注意して読んでもらいましたが、該当するような内容は一切ありませんでした。

Rotis の制作の目的として書かれているのは、p. 192 のこの部分だけです。

「The Ideological warfare between the representatives of Grotesque faces and the advocates of classical Roman type seems to have ended.」

訳：“(ローティスというフォント・ファミリーによって)グロテスク派と伝統的なローマン派との対立が克服されたといえよう。”

以下、ローマン体とグロテスク体(サンセリフ体)の特徴と機能を書き示し、比較して Rotis ファミリーがどのような成果をあげているかを書いています。宗教的な話は出てきません。



Otl Aicher 『typographie』(Wilhelm Ernst & Sohn Verlag fur Architektur und technische Wissenschaften 1988)

2 『Otl Aicher』の著者に聞く

マーカス・ラートゲブ (Markus Rathgeb) 氏による『Otl Aicher』は、アイヒャーの評伝として代表的な書籍です。この本の中に、Rotis 開発の詳しい経緯が書かれています (p. 209, p. 210)。Rotis は、照明会社 ERCO のための書体デザインがきっかけになっていること、何人ものアシスタントが Rotis 開発のために関わっていること、当初は、Serif、Semi-serif、Semi-sans の3つのタイプファミリーだったものが、後に Sans-serif が追加されたこと、などが書かれたあとに、パリの講演の話も出てきます。

“1988年10月17日にパリで開催されたアグファ・コンピュグラフィック (Agfa Compugraphic) のタイプフォーラムでアイヒャーがプレゼンテーションしたタイポグラフィのプログラムは、Rotis の制作について述べたものです。2つの親 (serif と sanserif) から成る4つの異なるフォントで、それらは論理的に開発されたものとして説明されましたが、実際の書体の開発に必ずしも反映しているわけではなく、それは、論理的というより直感的なものでした。このパリのプレゼンテーションでアイヒャーは、ローマン体のデザインとサンセリフ体のデザインによって、タイポグラフィの歴史において新しい章を開いたという印象を与えました。”

パリの講演に関する記述はこれだけです。やはり、宗教に関する話をしたという記述はありません。



Markus Rathgeb 『Otl Aicher』 (Phaidon Press 2007)

このマーカス・ラートゲブ氏に直接メールを送り、英訳した片塩氏のインタビュー記事を読んでもらい、どのように思うか聞いてみました。

「文章にアイヒャーの発言を引用するのであれば、筆者の片塩氏は、参考資料や出典を記載すべきです。」

「アイヒャーが Rotis をデザインした際の意図について書かれたこの記事の内容は、混乱しているように思えます。私の知る限り、アイヒャーのローティスに関する (自作した) 意図は、伝統とモダンのギャップを埋めることでした。彼の考えでは、両運動は依然としてせめぎ合っていると感じていたので、これは必要なことだったのです。これがプロテスタント主義とカトリック主義に重大な関係があることは、私は認識していません。」

「片塩氏の記事は、どういうわけか Rotis 書体に不自然なイデオロギーが付加され拡張されたもので、批判されるべきものです。」

「プロテスタント主義とカトリック主義、ならびに一般の生活、嗜好、書体の使用における様々な側面と両主義との関係に関する記述は非常に疑わしく、宗教史の極めて複雑な事柄に関する基礎知識にも繊細さにも欠けています。片塩氏の記述は、相当な浅薄さと単なる間違いの中間です。彼は宗教とグラフィック・コミュニケーションとを結び付けていますが、これは非常に冒険的なイメージを述べたものであり、私の考えでは現実を反映していないと思います。彼の文章表現スタイルは読者に間違った結論を下させてしまう場合さえあります。」

「また、ベルリンの壁とヨーロッパの関係についての記述も、私には判然としません。(Rotis の開発は) もっと一般的な話なのです。」

ちなみに、ベルリンの壁の記述については、先のドイツ語の翻訳者が気がついて知らせてくれました。ベルリンの壁の崩壊は1989年の11月で、アイヒャーが Rotis をパリの講演で発表した1年以上あとのことです。片塩氏による、“当時、ベルリンの壁も取り除かれ、EU 統合の動きが高まる中で遅れを取るまいという焦燥感もあったでしょう。アイヒャーは、パリで行われた講演会で、、、” の記述は、順序が逆転しています。

3— デザイナー、イアン・マクラレン氏に聞く

イアン・マクラレン (Ian McLaren) 氏は、ウルム造形大学でアイヒャーから直接教えを受けたデザイナーです。70年代初頭にアイヒャーのもとでミュンヘンオリンピックに関わるグラフィックデザインの仕事に副アートディレクターとして携わり、アイヒャーの人となり詳しく知っている人物だと思われます。この人にも直接メールを送り、片塩二郎氏の『デザインの現場』のインタビュー記事を読んでもらって、どのように思うかを聞いてみました。

カトリックとプロテスタントによる嗜好の違いに関する記述には一定の理解を示しましたが、アイヒャーの発言そのものには疑問を呈しました。

「この文章は、アイヒャーが言った可能性のあることを大雑把に翻訳したもののようによろしく読めます。彼は独特の示唆に富む方法で(彼独自のドイツ語の)言葉を使用する傾向がありました。」

「アイヒャー 独自の表現方法が、フランス語、それから日本語へと翻訳されることで、大きなダメージを受けたのではないかと思います。」

つまり、マクラレン氏自身も、Rotis の開発や発表の際にアイヒャーが宗教に関わるような発言をしたことは記憶しておらず、アイヒャーが独特の表現を好んで用いたため、翻訳を重ねるうちに変化してしまったのではないかと推測です。

4— パリの講演に同行した人に聞く

マクラレン氏はこの件に強く興味を持ってきて、パリの講演時にアイヒャーと同行した人を探して連絡をとってくれました。Compugraphic 社に努めていたアンドレアス・ウェーバー (Andreas Weber) 氏です。

「アイヒャーは、パリにいる間も、K. J. Maack (ERCO 社の人) 氏などのドイツ人達との夕食会の時も、美しく飾り立てたレトリックを頻繁に使っていました。しかしながら、そのような状況の中でも“いつかカトリックとプロテスタントの和解に貢献するだろう”のような話が、まじめに取り上げられたことはありませんでした。」

「アイヒャーは、パリで K. J. Maack 氏のサポートを受けながら“ドイツ語英語”を話したという事実があるので、この引用は、実際にはこのような表現ではなかったと思われます。」

マクラレン氏によれば、アイヒャーの英語力は非常に乏しかったそうです。当初考えていたように、レトリックを豊富に使ったドイツ語を、フランス語に訳した際に誤解を受けたものでもないようです。

5— ネット検索の結果

ネット上の情報も検索してみました。プロの翻訳者^{*4}に依頼して、“Rotis”、“Otl Aicher”、“プロテスタント”、“カトリック”の語で検索し、このような内容の情報がヒットするかどうかを確認してもらいました。

英語、ドイツ語、フランス語の環境でそれぞれ確認しましたが、このような内容はヒットしませんでした。念のため、“Rotis”、“Otl Aicher”、“宗教”、のように検索ワードを変えるなどして探してみましたが、やはりヒットしませんでした。英語環境では、唯一、タイプデザイナーの Tim Ahrens さんが Typophile のフォーラムのページで、この件を質問しているページがヒットしますが、これは氏の奥さんが日本人で、私が奥さんに聞いた質問を、代わりにフォーラムで聞いてくれたものです。このフォーラムでの質問の答としても、パリの講演でのアイヒャーの発言を記憶している人は出てきていません。

片塩氏の文章では、アイヒャーの発言が“これは大きな波紋を呼ぶことになりました。”と書いています。それが本当であれば、そのことがネット上でもなんらかの形で書かれていてもおかしくないはずですが、まったく1件もヒットしませんでした。この件に類似する事例すら見つけることはできませんでした。

これらの調査結果から事実がはっきりしてきました。アイヒャーは 1988 年のパリの講演で、カトリックとプロテスタントの話などしていません。アイヒャーが語ったとされる「…そしてわたしはローティスを作った。いずれローティスは、ヨーロッパにおける最大の対立項としての、カトリックとプロテスタントの相互の融和に貢献するだろう。」の片塩氏による記述は、間違っています。

片塩氏は、なぜこのような記述をしたのでしょうか？

●朗文堂の著作を調べるー『文字百景』の記述

これまでに日本で出版されている書籍や雑誌記事等を調べ、Rotis に関する記述を探してみました。

1995 年に朗文堂から発行された『タイポグラフィーの領域』(河野三男 著) の中に、数ページに渡って Rotis に関する詳細な記述がありますが、カトリックとプロテスタントの話は出てきません。

2004 年に雑誌『アイデア』でオトル・アイヒャーの特集が生まれ、Rotis 書体の話も詳しく掲載されています。アイヒャーや Rotis に関わった多くの海外のデザイナーが文章を書いています、ここにもカトリックとプロテスタントの話はまったく出てきません。

朗文堂から発行されていた、小型のタイポグラフィーの読み物で『文字百景』という冊子があります。さまざまなタイポグラフィーに関するトピックを書いたもので、100号まで発行されたものですが、この冊子の 1996 年発行の No. 25、26 に、以下のタイトルの文章があります。

「誌上討論会 ローティス活字をめぐる」

ドイツで行われた討論会を紹介する記事で、当時、発表されて間もない Rotis に対して、書体デザイナーのエリック・シュピーカーマン (Eric Spiekermann) 氏とグラフィックデザイナーのバウマン (Baumann) 夫妻がパネルディスカッションをした内容が書かれています。文章を書いたのは、組版工学研究会の坪山一三氏。Rotis に対して否定的な考えのシュピーカーマン氏と、肯定的なバウマン夫妻が激しく討論しています。その論争を紹介する文章の合間に挟む形で、坪山氏が両者と会った際のエピソードや、討論内容に即しての自分の意見などを書いています。

この中に、以下の記述があります。シュピーカーマン氏の発言です。

「私にとってローティスは、ハイプロテスタントで、ほとんどカルバン派的な書体であり、非常にドイツ的な書体です。…」

ドイツのデザイナーの一部の人たちが、Rotis を熱狂的に支持し使用している状況を、少し批判するようなニュアンスでこの言葉が出てきています。このあと、バウマン夫妻は、特にこの宗教的な言葉に対して意見を言うことはなく、Rotis 書体がなぜ支持されるのか、シュピーカーマン氏とは違う見解を述べ、討論は続いていきます。この討論会で宗教的な言葉が出てきたのは、唯一この部分だけなのですが、この発言に対して、坪山氏は強く反応しています。以下、坪山氏の文章です。

「ついにいつてしまったか……という感じです。宗教問題はわたしたちにとって、実にやっかいな問題をはらんで



『文字百景』No. 25, 26 (朗文堂 1996)

います。」

「しかし誤解を恐れずにいうと、タイプとタイポグラフィを語るためには、どうしても避けて通れないのが宗教であるのも事実なのです。」

坪山氏による宗教と書体やデザインに関する話は、このあと6ページに渡って続きます。そして、このトピックの最後に以下の文章があります。

「…それは書体の好みにも大きく反映されています。カソリックでは、いまなおローマ教会がおおきな存在であり、その象徴としてのローマ字、つまりローマン系活字が印刷物の主流を占めます。それに対して、機能性や合理性を追求してきたプロテスタントには、サンセリフ系書体がすなおに受け入れられるようです。」

この文章が何を根拠に書かれたものかはわかりません。誰かから聞いた話を書いたものなのか、本人の実感から書いたものか文面からはわかりませんが、ここに書かれた内容は、『デザインの現場』に書かれた内容と一致します。ただし、この小冊子の文章の中には、アイヒャーがパリの講演会で述べたとされる、

「…カソリックとプロテスタントというヨーロッパの二項対立を取り除きたい」

の言葉は出てきません。一カ所、パリの講演会の話が書かれた箇所がありますが、この言葉は紹介されていません。

周知の事実ですが、坪山一三という名前は、朗文堂 片塩二郎氏のペンネームです。この小冊子の文章と『デザインの現場』の文章は、同一人物によって書かれたものです。この小冊子は1996年10月に発行されています。『デザインの現場』のインタビュー記事は1997年の6月号ですから、この1年弱の間にアイヒャーの宗教に関する発言を追加したことになります。しかし、本当にそういう発言があったのであれば、最初からこの文字百景の文章の中で触れてしかなるべきだと思います。

“タイプやタイポグラフィは、宗教の影響を強く受けている”、という片塩氏本人の考えに、より信憑性を与えるため、『デザインの現場』のインタビューを受けた際に、アイヒャーの発言を意図的に創作して挿入したのではないのでしょうか？ そして、2003年に朗文堂から発売された『欧文書体百花事典』の中に、ドイツ人の著者に知らせることのないまま、自分で創作した話を勝手に追記したのではないのでしょうか？

オトル・アイヒャーはRotisの発表後、1991年に事故で亡くなっています。書体の創作意図に宗教が関係していたのかどうか、存命ならば本人に直接確認すれば簡単に確認がとれたことです。1997年の時点で、制作者自身がすでに亡くなっており、また、その当時はまだ海外サイトな

ども充実しておらず、少々の脚色をしても誰も調べることはできないであろうと過信したのではないかと想像します。実際、『欧文書体百花事典』にこの文章が載ってから、すでに10年以上たってしまいました。知らずにこの文章を読んで、感化されてしまった人もいるかもしれません。

『欧文書体百花事典』は、2013年に普及版があらためて出版されましたが、Rotisの文章はまったく変わらず、間違った記述がそのまま載っています。

もし、文字百景の文章の発表後、『デザインの現場』のインタビューまでの間に、アイヒャーの宗教発言を示すなんらかの資料を見つけたのであれば、それを公開する必要があります。少なくとも、私はそういう資料も証言も見つけることはできませんでした。

●Futura の噂話

今回のこの Rotis の検証作業には、強い既視感をおぼえました。いくら調べても、その事実を示す資料がどこにも見あたらないという今回の流れは、以前の Futura の噂話の調査とまったく同じだったからです。

“Futura にはナチスのイメージがあるため、イスラエルやドイツでの使用はタブーである”という話は、一時期さまざまなエピソードともに語られ流布していましたが、2004 年に小林章氏が、海外の有名デザイナーやタイポグラフィに関わる人達にこの件を尋ね、この話が根も葉もないことであることを『デザインの現場』の雑誌上で公表しました。この話は日本でだけ広まったものであり、さまざまなエピソードも日本だけで語られていたものでした(“タイプディレクターが答える 欧文書体 Q&A” 参照)。

私自身、片塩氏から Futura にはナチスのイメージがあるという話を、具体的なエピソードと共に直接聞いていたこともあり、疑問に思い一つひとつそのエピソードを検証してみました。しかし、実際にはそれらのエピソードを裏付けるものは一切出てきませんでした。この調査結果を『d/sign』の雑誌上で明らかにし、同時に、これらの噂話の出所が片塩二郎氏であることも公表しました(“Futura の噂話を検証する” 参照)。



2003 年『編集会議』10 月号に掲載された片塩氏の文章。
(p. 24 から抜粋)

それ以上を勉強しようと言っ
ようやくそういう人材が育ちつ
ますがね。
『欧文書体百花事典』にも書
が、『フツラ』という書体は、
れた時代が不幸でした、一九
で、ナチズムとくっついてしま
だからイスラエルではまずい
ワグナーをイスラエルでは演
い。それと同じように日本
ど、イスラエルでは『フツラ』
ずい。書体というのはどうし
性とか宗教とか時代性から
ない。日本も吞気でいられた

注：実際には『欧文書体百花事典』の中に、Futura= ナチスの話は書かれていません。

誰にも勘違いや思い違いはあります。文章を書く人は、自分の間違いに気がつけば、すぐにその間違いを公表して謝り、訂正すればいいのだと思います。なぜ Futura = ナチスイメージの間違った主張をしてしまったのか、もしその理由があるのであれば、そのことをちゃんと公表し、これ以上この話が拡散しないようにつとめるべきです。

“Futura の噂話を検証する” の内容は、『d/sign』誌掲載時に編集部から片塩氏に伝えられ、同時に、「反論があれば書いてください」という依頼をしています。しかし、その後、氏からはなんら反論も釈明も無いままそのままになっています。

朗文堂から発行された過去の書籍の中には、Futura = ナチスイメージをにおわせている文章が複数あります*5。残念ながら、現在までそれらが訂正された形跡はありません。大学などの公共の図書館に入っていれば、新たに Futura = ナチス説を信じてしまう学生が出てきてしまう恐れもあります。

当時、Futura の話は口から口へと伝えられ、広く伝播してしまいました。美術大学の先生がそのまま生徒に教えていた事例もあるようですし、一時期、日本の Wikipedia にまで書かれていました。ネット上にも Futura = ナチスイメージのエピソード話をブログで紹介している事例が多く見られました。

以前に比べるとずいぶんこの話は聞かなくなってきましたが、残念ながら、いまだに Futura = ナチスイメージ説を信じ込んでいる人はいます。内容が内容だけに、いったんそうに違いないと信じ込んでしまうと、なかなかその考えを覆すことが難しくなります。

2004 年の小林氏の雑誌発表で事実が示されて以後、朗文堂がこの問題にどのように対処するかを注視してきました。残念ながら、真摯にこの問題の解決に取り組んだようには見えません。

●タイポグラフィーとは何か？

今回の Rotis の件や、Futura の話以外にも、片塩氏の文章には間違いが多く見つかっています。単純な間違いや誤植のレベルのものもありますが、中には、事実と事実の間を埋めるため、推測で新たな事実を作っている事例もみられます。しっかりと確認作業をしないまま、推測で作った話を、あたかもそのような事実があったかのようにディテールをふくらませて断定して書いているため、よほどその内容に詳しい人でないかぎり、推測で書かれた文章とは気がつかないのです。

朗文堂の書籍をもとにしてタイポグラフィーの勉強をした人は多いと思います。片塩氏の著作を読んだ人も多いでしょう。研究者の文章として無自覚に受け入れてしまっているうちに、知らず知らずのうちに、主観的に切り取られた間違っただ話まで読んでしまい、いつのまにか、片塩氏のフィルターのかかったタイポグラフィー観に染まってしまうこととなります。このことはきちんと自覚する必要があります。

タイポグラフィーとは何でしょうか？ 複雑に難しく解釈する必要はありません。“印刷用の書体を使って、読みやすく並べること” だと思います。とてもシンプルなことです。

タイポグラフィーに関わる人は、著者が書いた文章を、誤解のないように、間違っただと解釈されることがないように、気をつけて扱う必要があります。組版作業に関わる人が、自分の意見や解釈を著者の文章に付加したり、誤解を生んでしまうような行為は、あってはならないことです。当たり前前のことです。タイポグラフィーの文章を書く人も、当然その精神を持っていてしかるべきです。

タイポグラフィーの仕事に関わる人に求められる態度を一言であらわせば、“誠実さ” です。

残念ながら今回指摘した片塩氏の文章は、自分の持って行きたい方向に恣意的に事実をゆがめ、信じ込ませて誘導する行為だと思います。本質的にタイポグラフィーの根本の精神から反することです。この件に少しでも誠実に取り組む意思があるのであれば、間違っただと記述や誤解を生む文章は、速やかに修正されるべきです。

Rotis の記述、Futura の記述が、一刻も早く修正されることを望みます。

○追記

わずか 9 ページのこの文章を書くにあたり、ずいぶん時間がかかってしまいました。仕事の合間をぬって、不得手な英語でのメールでのやり取りが多く、思いのほか煩雑な作業となってしまいました。『欧文書体百花事典』にこの件が書かれていることに、長い間気がつかなかったことも一因です。もっと早く気がつくべきでした。

今回のこの調査・確認作業は決して楽しい作業ではなく、私自身、ずっと眉間にしわを寄せていた気がします。タイポグラフィー自体は本来もっと楽しいものです。海外のタイプコンファレンスに参加すると、笑い声が多いことに驚かされます。笑顔で書体のことを気楽に語り合えるような、健全な空気が日本のタイポグラフィーの業界内にあふれることを望みます。と同時に、おかしなことはおかしいと堂々と意見を言える業界でもあるべきです。この文章が、少しでもその一助になればと思います。

立野竜一

グラフィックデザイナー

欧文タイプデザイナー

欧文カリグラファー

注釈

*1---- 記事内では“1921—91”となっていますが、アイヒャーの正確な生年月日は 1922 年 5 月 13 日なので、“1922—91”が正しい。

*2---- 2013 年 9 月 6 日に、シュナイダー氏が勤める、東京日本橋のオフィスで話を伺いました。

*3---- ドイツ語の翻訳者、ユミコ・アイクマイヤーさん。
<http://www.naranoki.de>

*4---- フランス語の翻訳者、佐々木実さん。
英語とドイツ語の検索はユミコ・アイクマイヤーさんによる。

*5---- 『書物と活字』（朗文堂 1998）p. 233
『ふたりのチヒョルト』（朗文堂 2000）p. 218、
p. 346